瀧井孝作ノオト（二）

唐井清六

「ツチグモ」に発表された瀧井孝作の初期文章。

。我れがまゝ

■「水餅や餘寒の水に殘りある」その水餅が雫のついたまゝ据えられてある様な、ものゝすべてが甘い潤ひを着て、山も野も田も、鳩の胸毛のやうな雲に漉された、淡い太陽の光りに覆はれてゐる大和の國の塔原に私一人のつゝましやかな影があつた。それは二千五百七十四年の紀元節の午後で、此日はさすがに農夫達も耕轉のそとに己れを置いて居た。野に立つ一人、自分の足袋のあからさまを思ふとき、野邊に枯れ伏す草葉の上に、何とはなし心惹かるゝ私が其處に居た。人めもくさもかれ〴〵の、一と冬中のうき風に、さらりと、枯草はおのれの夾雜したものを吹き拂はせて愈々春が來た時、彼は大きいあきらめの中にやすらかに眠る、然うしてやがて新らしく萌え出る草に此土地を禪つて、おのれは元の土に歸するのである。本原に合致する前、枯草は春を美くしくあるよ。人にあまたゝび披ろげる事を委ねた經文の、紙の黄がよろこびの涙に褪せたやうな色に枯草は、二月の野に何處までも展べられて居る。其様に靡きつくした枯草の中に、法輪寺と法起寺の三重の塔が、丘陵一つを隔てゝおとゝいの様な容

ちをもたげて居た。法隆寺のものと同じ齡ひを重ねては居るが、三重の塔はそれより高さが少ないだけ其の安定は快よい落つきを示して觀る者に對する。法起寺のそれは他に比して裳層が無く、すつきりとした圓柱はあからさまにエンタシスを見せてゐた。されば塔の平面はやさしい直線的な快感によつて滿たされ單純なものゝ眞の美しさが覗はれる。純一なもの、この生命は何等の智的考察をめぐらすまでもなく、ひたと胸にしみ込んで來る、このとき人間の脊なは塔の扉にすれ〳〵懷しみを寄せてゐた——塔を脊負ふて、春淺み野面にむかひながら、美しく敷きのべられた枯草の上に、私の柔かな睫毛を透してやさしい視線が投げられて居た

■冬を去なすべく春に味方する今日この頃の雨、都會の人はその雨の糸を見てしばかり、自然の移り變りにつまされて、いとほしき己のが心のやりばもがなと按じる。恁うしたとき、私はよく文樂に私のからだを運んだ。樂曲は感知するものなりと信ず。私は、いつも名人の語り口が、私の肉体を押して居るのを覺えた。私のほてつた果の樣な頰の肉は越路の聲調のたゆたひに觸れ、其の旋律の翳り鮮かなるにうたれて我れながら内身の顫へる事が一度ならずあつた。越路は心の能辯な太夫である。されば彼に語り活かされた劇中の人物は個々の性格によつて呼吸する。そうしてこの寺小屋での松王は忠義の爲めに子供を犧牲にせようと考へ武部源藏は主君の爲めに他人の子を殺害する事を企てた。かゝる思想はグロテスクなものにて且つ我々にとりては無法極るものなり。然るに多くの人は松王や源藏の此行爲に感動しておつた。まことに不思議なるかな。越路その人が、構成されたる劇をはつきりと語り別けて呉れる事から、ついこの脚本の惡しき事を知つたが、今更それを罵つても致し方なし、されば物は見方一つにて、此場面にも佳い箇所尠からざるを思へばさは言ふべきものにもあらず。「ちよまヨちよまヨ……」などゝ云ふ處、原作者も興に乘じて筆を走らせたらしく輕妙な文句は、重々しい舞臺を色めき立たせるに充分である。假令背景に松王玄蕃などゝ云ふおかしな人物が筋を成すに役立つて居るとは謂へ、百姓と數々の子供とのからまるユーモアは劇全體の意匠化を完ふし、やがては筋を超越したる裝飾的快感をそゝる。此場合吉兵衛の糸は、浮

世繪に彩色施す心持を思はしめる。温柔な三の糸のメロヂイは燻し色の澁い光りに、また急に調子の高い太棹は、藍染絞りを水上げした雫の垂る様な音色を傳へて、ほんたうに、浮世繪が極端な餘色を、愛すべき濃淡を以て奇しくも調和の妙を保つが如く、深い工夫とあまたゝびの修練が積まれてこの玄妙な樂曲は完成された。マヂツクな藝術、そは我々に聽官の判斷を以てのみする事を許さ無い、須らく感觸すべきのみ（「ツチグモ」創刊号・大正三年三月）

死沼の底

人はたやすく神祕に慣れる。大きい不可思議、深い疑惑、そう云つたものに永くとりまかれて居るうち終ひには、それを不思議にも思はなくなり、疑ひも起らなくなる。神祕を見る眼は失せて盲目となる

見ようとする意志のない人は、眼の必要を感ぜずして、眼を働かせる事なしに、やがて眼の使ひ道を忘れて行く。生きる上に於て、肉体の諸機能をそれ〴〵に働かせる事は、なみ〳〵ならぬ努力を要する事である　さりながら多くの人は、努力するの意志を持たず、しばしなりとも無爲安逸に耽らうとする。其安逸生活はすべてもの事を創造する事なくして、前例のまゝを繰り返す場合に營まれ、續いて無爲生活は爭鬪による改善進歩を夢想だもしないのである。征服せざれば敗亡もない、凡べて沈滯した、澱んだ有様なのである

一つの沼、古沼そこへは濺ぐ泉だもなく、また流れ出る小川もなくして、其沼池の水は年古るまゝに腐れて行く、一と時雨が降つて水がたまつたと云ふても何程增水するだらう、一日天日による蒸發の量に若かないのである、されば其沼はやがて褪せ行く運命を擔はなければならなくなる。其様に人の生活の上に於ても何等動亂のなき、變轉せない、精力の泉の流れざる無爲生活は、恰度古沼のやうなもので、常に動いてやまない自然に反則する事から、やがて自滅亡衰する時が迫るのである

おゝ、悲しい古沼、そのやうな慘ましい町、その中には、安逸、無爲、何等の向上發達をも望まない人々が、腐

つた水の様に澱んでゐる。因襲を固守し、習慣に拘泥する人々、思想は水が腐れて行くやうに動かなくなる

そういふ腐つた水ばかりの古沼の中へ、新らしい魚鮮かな鱗の魚が、外から來て棲む事をよぎなくせしめられた場合があるとすれば如何であらう。ぬら〳〵する水は氣味惡るく尾鰭にまつはつて運動を妨げる、泥の匂ひは心神を腐らせやうとする、己れのからだが頽廢し、崩れ溶ろけて行く事をまざ〳〵と感ずる心惡るさ。そうした生活に堪ゑられるか如何か、それに打かとうとする努力の見ゑるうちは、まだ生きて居る事を覺ゆるし、總べての精力を耗らして、もはやそれに堪ゑられなくなつた時、其處に這ひよる運命は何であらう、想像してだに恐ろしさに顫ゑるではないか

周圍に同化する、周圍と妥協する、周圍に降服する忌まはしい言葉では無からうか。自身、征服されたりとの心持がある間は、一度はね返すあるものをはぐらんで居るのだ、がそれもやがて周圍の感化によつて忘れて行くならば、そのまゝ征服された事が當然であるとの様に考ふるに到れば、それは自身のみうちに向つて大きな罪惡を犯す事になるのである、自身が自殺したよりも自己に謀反するものである。自己それは自然である、自然にそむくのは自殺するよりももつと大きな苦痛である事に心付かねばならぬ

苦痛に氣がつかぬといふのは魂がなくなつた事である、魂がなくなれば、喜びも、悲みもわからなくなる　魂が亡ぶ、心が失せる、知覺がなくなつた、そういふ事を思はずして、苦しみを知らぬ多くの人は、安穩であります、と云ひながらくらして居る

安穩、幸福、それは上はべのみだ、眞の平和はもつともつと高い處にある、人は苦しみに盲ひであつて、樂しみに明かるく生きたいと望んでゐる、それは不可能な事でまた有り得可からざる事である。人はそれを爲し得ると考へる、そういふ所に住まへると思つてゐる、そして安穩だといふ、幸福だといふ。けれどもそれは單に人爲的の平穩であつて、自然にともなはないものである、眞ではなくして僞りだ。嘘を眞んとうだと思つてゐる、一人が信じ

て歩るいた道よりも、多勢でとつた道の方が佳いと言ふ、それも間違ひだ、もとから同一でない人々が、いくらかづゝ自己の本心を曲げて一とつに來た道、それを純なものだ、眞であると云へようか

ほんたうの世の中で、凡ての人が一から十までみんな同じ考へを持ち、同じ事を行り、尠しも異る處がなかつたならば、人の世の進歩といふものは無いのである　またそれでは生活がどんなにかものたらなく思はれ、個々の人々は非常な淋しみを感じるのである、自他の區別がつかない、そういふ事は淋しみのもつとひどい恐怖となるのである。多くの人はそれに些しも氣がつかないあはれな衆愚よ、悲い人達よ、みんなは知らない、考へない。生きて居るのか死んでゐるのかわからずに暮す、眞っ暗な沼の底に、日の目もみず、たゞ闇の底に何にも知らずに栖んでゐる――五、二四――（「ツチグモ」第二号・大正三年六月）

黴草紙

雨水

雨水そゝげば、人々鱗くづの喰喝する如く、衢に世渡りの泳ぎをする

雨に濡れたる甍の波、なめらかに栖む人々のあたまの上にひろごれるよ。窓より仰ぐ空の色、雲母の鈍きひかりを見せて、やがて白ばゐ降り來らんか。街の中樹林は人の庭にのみ、それも生ひ茂れるにはあらで、庇の下に空の穴目を覗くが如く、木の葉も淋しく肩をすぼむる生涯あはれ。いつはりの世にまことなるものゝ容れられざる、曲りたる道を直なるものゝ歩みがたなき、陋巷に自然の生たちむつかしきかな

幌の中に運ばるゝものと、外の雨に打たれて駛るものと、その隔たりいくばくなる。己が身のまはりより大いなる傘ひろげ被りて、眞っ直に天ま落る水を防ぐ是れ自然に反する事のはなはだしき

矛盾は人の多きより都會に於ていちじるし、されどすべての雑念を排して靜かに觀じ來れば、雨中小景、賞すべ

きものなきにあらず、その水々しき梅雨の眺めは、玻璃の中に置かれたる如き思ひあり、心してものみなを看んかな

虚空

傘の下徑三尺、五尺の己れの姿の濡れぬこそいぶかしけれ。そのまゝ道を進めば雨の糸は傘の端に切られ行く、雨は人のなすまゝに傘の中は落つる雫もなく、大氣は冷やかにその小さな世界を守りて、他の物象と相觸るゝゆらめきを雨の簾に遮ぎられてあり。過ぎてしあとは切られたる雨糸早繼ぎもやせし、すきまもなく降り埋て、我が通りたるあとかたもなき、さてもげに虚空とは呼びつれ

虚空そは自然なり、自然はあらゆるものに從はずまた反抗せず、理非を知らず情實にも捉はれず、凡て目的を持たざれば手段を執る事なし虚無なればこそ全体なり、心なきが故に思ひのまゝなり

かゝる虚空を、ものゝ落來るさまはまつ直にて、雨の本質もまた然り

市中にて人あまた行き交ふ折、傘をゆがめんか、心なく呵責を知らざる雨は考ふるなき卒直を以て容赦なく降りかゝりに來る。こは雨のあしざまにはあらずして人の傘傾けたるあやまちによる、傘かたく事をあゐてなせし人のよこしまのみ

行路

雨上りて地潤へるを知る。市中最も多く人の行き交ふ所をありくに、路上は粘力ある護謨の上を踏む如き心地さる。幾萬人が日々踏み締むる土は、細まかに小砂と碎けて、また下駄の齒、車の轍にすり揉まるゝ毎小砂は細末として練られ行き粘土の質を帶ぶるに至る然も底の地盤の固きが、上面に快よく薄つすら引かれたる柔かき土のこゝ

ろもちとして、足ざはりに執着あるとも思はれ、また淡々しきあきらめのある如くも覺ゆる。桐の下駄などに輕く身をのせてあゆめば、軟らかき木質のよろこびはうるほひある土になづみて、一歩々々のしめやかな接觸を享樂するものゝ如く、おのづとあし捌きにリヅムのともないて、こゝろ生き〳〵とおどり來るよ

土のこまかになり行ける道、そは多くの人の力が押し過ぎける迹なり。人々は日々己れの力を放射しつゝ生きるもの、力は外に出づる時より多く內に湧き來たるものなり

萬人のねがひは生の行路をあゆみ盡くさぬ事にこそ命永かれかしと思ふ心は、行く手の道の遠きほど歡ばしきものなれ

織物

蝙蝠の羽ばたきに誘はるゝ夏の夕べのそゞろありき兩側の家々の灯に視まもられながら、袖は人に觸れ戀そゝる。華やかな街のあかるみに、人のまなざし相い合ひ行くもおかしき

裝ひ凝らして、裝ふために有るものゝ市に行く、人々は現在の己れの姿と店舗の衣裳とを見比べつゝ、我れまされりや彼れ劣れりやを考ふ、その心を惹く爲めに商人はいつも新しき意匠を案出して流行の向きを示しつ。されば其の指示されたる方にさきがけせんとして人は流行品を求める、かゝるを虛榮の人とは云ふ

虛榮とは自身の本然の心の赴くまゝに身を處するにはあらで、自分を措きて多くの人の心を得ようとする、多くの人の心を圖り自分を虛ろにして他人の方向に目をそゝぐ事、さてもあさまし

人の爲めにきらびやかな市、かろやかなる織物のエタラージュは、街頭に出さかる人の虛榮心をもてあそぶか、瓦斯のともしの白ら〳〵しく燃ゆる。都會の夜なり、人は店を見る、店は人に眺めらる、織物の市織るが如し。賑ひの中、我は一人空を仰ぎながらありく家の屋根は人の目に忘れられたれば淋しく暗し、唯空は蒼々と暮て雲流る

ゝよ――人のどよめくあたまの上にかばかり巖かなる天があるとは

船の腹

船の腹、そを思ひめぐらすまゝかいつける。船と云へば水に泛ぶものと云ひなされ居れども、船の腹は常に水に沈み居るもの、その船の腹の水に浸り居る心持こそうるほひある感興を惹く

蒼々溟々煙るが如き水中、ものゝ凡べてがくゞもれるかに、個々見分けのつき難き世界にいつも面接してその神祕なるありさまを覗きながら、深く沈潛して究はむる事も出來ぬ船の腹は、浮び上がるともなく沈み込むともなき境涯にあり。そは船自身脊を大氣にさらして判然たる物を視、腹を水中に面伏せて混沌たるものに觸れて居るが故に。上半面の認識、下半面の懷疑然も深刻なるは此疑惑のうちにあり、船の腹は水を壓し水に押されて居ながら彼自身の世界を進んで行く、水中の祕密、恐怖、不可解なるものゝ力、そは船の腹の底にこそありて、船の腹は水に浸りながらすべての水中の神祕に親みを持つ、水に濡れ〳〵たるものゝ情味は、涙の顔をもたげたる女の凄艶なるおもかげの如く、深きうるほひは神祕と何事をかさゝやきかはしつ

水に慣たる大阪の都市、人は船をかりて生活を、便にす、されど人はもの運ぶ船を知りて水に接する船の腹を悟らず。されば潤ひなき深みなき淺薄なる物質生活を事として日々を送り、無味なる生を乾物にしては過ごしつゝあり（「ツチグモ」第三号・大正三年八月）

俳句會

美矢ちやんがドコからかの贈り物の菓子箱を其處に置いて、先生に贈り物の口上をいふて居られました、そして、「これは碧童さんに上げるのではないんですよ。」と附け加へられました、菓子箱は碧童さんの膝元に置かれてあ

つたのです。私は其の場面をこちらから眺めて居て面白く感じました。尚小さい娘子さんが碧童さんなんて口馴れた調子で雅號を呼ばれる事も感興を惹くのでありました。私が、「瀧井であります。」と訪ふたとき、取次いで下すつた美矢ちやんはいぶかしそうな顔をされましたが、「折柴が参りました。」そう云へば聞ゐがよかつたかも知れませぬ。そういふ風に根岸のお宅には、普通の姓名より俳句に用ふ雅號の方が通りよく、また親くなじまれ易いといふ特別な空氣があるやうに思はれました

玄關へ通りますと和露君の話し聲が聞ゐました、障子の陰から椽側に五六人俳人が居られました、私には初めて見る人で未だ尋ねても見ませぬから名も知らぬ人でありました。默つて格子を開けてそつと上つて來られた人があります、俳句雜誌の寫眞で覺ゐのある顔です、「一碧樓君が來られました。」こちらの一人がそう先生に云はれたので、私ははあ此の人かと更に見返るやうな氣で、私の上京顔を揚げました、然し私は默つてゐました。「初めまして、こんど上京しました折柴で御座います、どうぞよろしく。」などゝいふ挨拶は誰にも換はしませんでした

先生は私の顔を見て、「このあいだ六花君とこで氣焔をあげたそうだね、六花君も、ゐらい事を云ふので何と言つていゝか困つてしまつた、といふて居たよ。」こんな事を云はれました

私は獨り苦笑してゐました。この事は私が着京した次ぎの日碧師を訪ねましたら、「之から政教社へ行かねばならぬから……」といふて居られましたのでよくお話しする事も出來ず、その足で、梅林寺を訪ねましたのです。六花さんが、唯私の喋るまゝに任せて居られるものですからつい勝手な事を述べ立てゝしまつたのです、そして別に六花氏の意見といふものは聽かれなかつたのでした。東京では井泉水氏を一度訪ねたとき同じやうに私が自分の考へを持出したけれども別に得る所もありませんでしたから、是れは人なんてそう訪問した所が徒勞に終るだけじや、と思はれて其後引籠つてゐてドコへも行かなかつたのです。碧師が御病氣だといふ事も知つてましたけれどもそれすら御見舞もせない程ウチにばかり居ました。そしてけふ十月の四日だといふ日曜でもあり、東京俳句會は初めて

でありましたから、その最初といふ所に惹かれて出て來たのです

みんなが碧童氏のお宅（當日の會場）に移つてから、「題を出して貰はう。」といふ事で碧師は鳥渡案じて居られました。會衆は與へられる興味を待つといふやうに、カタヅを呑んで控へてゐました。興趣を集中すべきその題は、この都會とかけ離れた山の匂ひの強い「茸」といふのでありました

大阪あたりの句會と違つてこちらのそれは、みんなが押し默つて所謂專念に句に没頭してゐます、ですから私もいまゝでと異る境遇に自分が置かれてゐるやうに感じました

清記がすんで、五句互選といふ事で廻はつて來た作品を見ますと、主に自然を對象として描寫したやうな句が並んで居ますが、その中にちよい〳〵交つて違つた形式の作が異彩を放つてゐます。私には在來のやうな型の句は頭に殘らなかつたのですけれども、少しづゝ見ゐる句は目を惹きました、然し目を惹かれましただけで共鳴するところまでは行きませむでした

瓦斯が灯されてから先生の讀上げによつて互選の披露がありました、私はそれを聞いて居りましたが大勢の人が一樣うに五句づゝ選をする事にきめられてゐるので、その點に於ては私初じめいゝ位な選をして居るのですからあまり問題にもしませんでした。といふと「句會に來て採點をどうでもいゝといふのは切角會に來た甲斐がないじやあないか？」と普通の人はいふかも知れませぬ、でしたら私は冷然と晒落て斯う云ふでせふ、「會に來た甲斐がない、然うだ會がなくなつて私一人になるのだ。」と——

さてこの多勢で選んだ高點句といふものゝ批評が、碧師や乙字氏によつて後で爲されるのだろうと思はれましたが、もう夕暮で腹もすいてきましたし、それに私は六時にある男と會ふ約がありましたので、まだすまぬ途中で出てしまひました。つまり會に來た甲斐がない「徒勞」を完ふしたのであります。（「ツチグモ」第四号・大正三年十二月）

正月

過去を懐しむのは堕落だと思ふ。然し過去を顧みて現在を反省するのは惡い事ではない、それは書籍を讀みながら、自分はこゝまで來てゐるがこの書物はこの所まで行つてゐるといふ事を知るのと同じであるから

自分は二十一度新年といふものに出逢ふたわけであるけれども、記憶に存じてをるものは最近二三年前の正月があるのみである。それは一昨々年の春の、ことに濃い色彩がそれ以前の自分の閲歴を塗りかくしてしまつてゐるからであろう。趣味低徊ともいふべき方から云へば明治四十五年の正月は、自分の生涯の一ページを最も華かに飾るものであつた。いまの自分は今後あのやうな境遇に置かれる事があるとも想像しないし、またそれを希ひもしない、かへつてそういふ境遇に置かれる事を望まない方である

――雪の山々のうねりは眞白な花瓣が八重に層なりながら天に向つて開いたやうで、そのはなびらの間むしろ眞ん中の蕋ともいふやうな飛驒の中央の美しい高山の町に生れて、そのまんまそつと置かれてあつた自分は、十八といふ年を終らうとしてひとりの女を知つた。自分は大年の夜もすがらその女を倶して宮々寺々を禮拜して巡つた、東の岳々の雪がまだ初日を浴びない紫の黎明のうちに、町の西郊の古いお寺の塔の扉に凭つて、女の唇に自分の唇を押しあてゝゐた……そうして赤い正月が來た。其あまりに妖艶な世界から脱がれる爲に、自分は自分のからだを異る所に置かうとした。そうして大正二年といふ新年は大阪で迎へた。澤山の河の藍色の中に自分は浸つてゐた。青い正月が目の前にあつた。大正三年の春も同じ土地に据つてゐたが心持はよほどかはつてゐた。人々の顔の筋肉はみなたるんでゐると思はれた。その癖あぶらぎつてゐるのが目についた。街上から仰ぐ空は、兩側の屋根々々の高み低みで不揃に狭まく劃られてゐた。黄いろい正月を見た。

それから東京に移つた今年は、自分の周圍は非常に氣持のいゝものである。うちの二階の廣場に面した窓の硝子に頬をよせて、屠蘇に上氣したやうな心持で人々の爲めに歌加留多を吟誦した、それは元日の午前の事であつた。

午後にはI君の處へ行く郊外の家の障子は明かるく一ぱい日をふくんでゐて、自分の耳にのどかな凧のうなりが傳つた。I君と快く話してをるうちに、夕日は野の向ふの林の中へ落ちて行つた。二日にはA君が訪ねてくれる筈なのでそれを待つ、そのひまに年賀狀の事を考へてゐた。自分がだん〳〵大人びて社會といふものに接觸して行くにしたがつて、交際も頻繁になり賀狀も年々多く貰ふが、自分はついぞ賀狀を出した事がない。ことしになつて殊に賀狀を貰ふといふ事が何か知ら壓迫を感ずるやうになつた、自分が年賀狀を出さないヒガミかも知れないけれど、『お目出度う』とやつてこられると習俗に襲はれるやうな氣がするのである。自分はそれを避けやうとはしない、賀狀は享けて置くが返しは出さない事とした。――午少し前A君と顔を合はせる、A君はいつものやうにいろ〳〵な問題を持出して話しかける、此の人は忠實に考へる人だ。A君を考へる人だといふのは自分自身も考へるタチだからである。自分はこの頃すべてのものを肯定するやうな傾向がある、然し何にでも感心するけれどもそれにかぶれるやうな事は決してないといふ自信をもつてゐる。自分に色々なものが向つて來、自分も種々なものにブツ、かるが、自分は決して撥ねかへしはしないやはり自分の中に收めてしまふ。けれどもその色に染まりはしない。どんなものに觸れどんなものを取つても自分は眞白で在る事が出來る。そうして自分は赤、青、黄、すべてを脱却して白い正月をつくつたのである。（一九一五、一、三）（「ツチグモ」第五号・大正四年一月）